

JGAP農場のブランド作り

2010年も押し詰まり、残すところあと少し。本年の締めくくりに、元気なJGAP認証農場を3例紹介して、当紙2010年度最終号としたい。

NPO法人日本GAP協会が発表した、11月末のJGAP認証農場数は1030に達した。農場数は毎年倍増し、来年度は2000農場を越す勢いである。最近の傾向として、緑茶や青果で団体での取り組みが増え始めている。個別の農場では、生産量、販売量に限りがあり安定供給が難しい。産地ブランドにするには団体で取り組み、品質基準を設け、高品質な商品作りが必要である。JGAP認証農場のブランド作りに熱心な農場を紹介する。

にしたな(株)『第8回国際銘茶品評会』の緑茶部門で金賞受賞

みっかわ
 三川茶・・・かなりのお茶通でもどこの産地か分からないのではないかと。「にしたな(株)」は、静岡県袋井市三川で茶の栽培を営んでいる。三川は袋井市の北西に位置し、古くからの銘茶の産地である遠州森町、ジュピロ磐田で有名な磐田市と隣り合わせた茶産地だ。三川は茶産地としては後進地の為、品質の割りに茶価が上がり苦勞してきた。しかし、その逆境があった為、他の産地に負けない熱意を持った生産者が互いに切磋琢磨し続けた結果、年々評価が上がり、近年は注目の茶産地となっている。



その中で「にしたな(株) (静岡県袋井市)」は品質向上、新しい茶の製法の研究、努力と共に、他工場との差別化をするためJGAP・ISO14001を取得し、さらに次の一手として品評会へ挑戦する事を決意した。元静岡県茶業試験場の場長の小泊重洋先生に相談し、今年、世界優良茶品評会へ出品した。去る10月16、17日に台湾の台中市で、世界茶連合会が主催する国際的な茶の品評会「第8回国際銘茶品評会」の最終決戦および表彰式が開催された。今回の品評会には日本から31点が出品され、一次審査で金賞と銀賞が決定し、今回はその中で世界佳茗大賞が選出された。緑茶の部門では川根本町の丹野園丹野浩之氏の出品した「川根 / 川霧の輝き」が世界佳茗大賞を受賞した。にしたな(株)も研究の成果が実り、見事金賞に輝いた。日本からは、にしたな(株)の鈴木治氏と(株)大井川茶園の榎本祐行氏が表彰式に出席し、表彰盾を授与された。今後、にしたな(株)が、安心・安全のJGAP認証を受け、しかも世界銘茶品評会金賞受賞の美味しいお茶を武器に益々発展し、三川茶産地の名が全国区になる事を期待したい。

豊田肥料(株) (袋井市) 早川克己氏の報告によると、緑茶は以前から製茶工場を軸とした団体での取り組みが多く、JGAP認証農場のにしたな(株)は、自園と契約農場でJGAP団体認証(41農場)を取得した。豊田肥料(株)の指導によって、2年掛りでJGAPに団体で取り組み、肥料や栽培管理を見直し、全農場の品質(味)を均一に高めブランド化を狙った。そしてJGAP認証取得後、銀座の有名な老舗の某鮎店のお茶にも採用されている。JGAPをベースに品質によるブランド化である。

味と香りに拘る“葉取らずりんご”

青果では、りんご(青森県:岩木山りんご生産出荷組合GAP部会57農場)や、キウイフルーツ(愛媛県:東予園芸農業協同組合138農場)等が団体認証を取得し、産地ブランド化を図っている。りんごの消費は年々落ちる一方で、青森県のりんご販売もブランドを傷つける事故が続く、厳しい販売

(次ページへ続く)

(前ページより続く)

環境にある。今年も産地偽装事件があり、異常気象の影響で着色の遅れや品質も例年通りとはいかない。生産者の高齢化で担い手のいない廃園も減少の気配がない。

このような厳しい販売環境の中、岩木山りんご生産出荷組合GAP部会は、安全・安心だけでなく“葉取らずりんご”のブランドで味(高糖度・酸味)香りに拘り、糖度センサーで糖度別(14度以上)サイズ別に選別して商品企画し、元気に販売努力をしている。まだまだ、生産者によって管理や品質にはばらつきがあり、高品質のりんごの割合が多いとはいえないが、地元の肥料商(株)櫛引商店や、A・パートナーの木村氏によるJGAP導入指導と施肥指導により、高品質のりんご作りに取り組み始めている。栽培技術・知識の指標化など研修会を重ね、りんごの販売キャンペーンも実施している。



今月11~12日も関越道三芳サービスエリアにオープンした“パサール三芳”で、試食やジュースの試飲による販売促進会を実施し、自ら消費者に直面販売。自慢のりんごの評価を直接受けた。なかなか厳しい評価であったらしく、後日の研修会は反省と今後の戦略について力が入ったようだ。安全・安心、外観だけでなく如何に味が重要か、果物は嗜好品である為、消費者が一度低い評価を下すと、ブランドを構築するのはかなり厳しい。玄関に入るとりんごが送られた

ことが分かる、美味しいりんごの香りがするそんなりんごを作りたい。他の誰かに送って食べさせたい、そう思われる様な感動を与えるりんご作りが夢である。

ミネラル肥料栽培で今年もガッチリ、オール1等米 山波農場

新潟県柏崎市のJGAP認証農場、農業生産法人(有)山波農場は、(株)ネイグル新潟(新潟市)の指導の下、猛暑を克服し高品質を確保、栽培品種全てが1等米であった。経営面積は94.7haで水稲作付面積は約70ha、コシヒカリBL42ha、ひとめぼれ18ha、こがねもちが10haとなっている。5年前にJGAPの導入を開始し、認証まで一年以上掛けて今月3回目の更新審査を受けた。山波社長の長男である剛氏が、JGAPを導入して大きく変わったのは社員の意識、作業計画、段取りがスムーズに運び、栽培管理が効率良くなったことだと言う。かつて発酵鶏糞堆肥を使用していたが、平成6年以降ダイナミックに改善してきた。

ミネラル肥料栽培を指導してきた、(株)ネイグル新潟の清田部長は、たとえ高温でも水管理と肥料の栄養で根が丈夫ならば、高温のダメージは回避できるという。エムシー・ファーティコム社のミネラル肥料「ハイグリーン、ホスピタ」や微生物分解型緩効性オキサミド肥料「ニューケブラ」を施用し、高品質・良食味を目指した米作りをしている。新潟県の2010年産米の1等米比率が21.3%の中、今年の結果(100%1等米)には、県がわざわざ調査に来たそうである。来年がどんな天候になると、ミネラル肥料栽培でガッチリ儲けて頂きたい。



本年も当紙をご愛読下さいまして、誠に有難うございました。一年を通していかがでしたでしょうか?来年もよりよい紙面作りに励んで参りますので、どうぞ宜しくお願い申し上げます。皆様どうぞ良いお年をお迎え下さい。

編集局長：小田原次洋 アシスタント：助川尚子

電話：03-5802-2011/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp URL http://www.mcagri.jp